

編集後記

第66巻4号(12月号)をお届けいたします。昨年(2019年)の第65巻第2号(6月号)の編集後記で、一昨年(2018年)から議論となっているオンライン化と学会誌の役割について触れましたが、図らずも本年(2020年)は新型コロナ禍により「リモート」「テレ」「オンライン」といったものが社会現象にまでなっていました。

本学会においても、9月26日(土)の「第55回日本医史学会神奈川地方会秋季例会 日本医史学会 合同例会」は三密対策をとっての実地開催、10月24日(土)の例会は実地とオンラインのハイブリッド開催、12月19日(土)～12月28日(月)の「第121回日本医史学会学術大会」は、オンデマンド配信開催となりました。

実地開催には実地でしかなしえないものももちろんありますし、オンライン開催においても遠隔地からの発表や参加が可能であるなどの利点も存在します。また、実地とオンラインは必ずしも二者択一ではなく、ハイブリッド形式という選択肢や、そもそもオンライン開催にも複数のやり方が存在します。

例会や大会には、会員の日々の研究成果を共有するだけでなくコミュニケーションの場としての役割があります。どのようにすれば、この未知の状況に対応しながらその役割を果たし続けていけるのか、議論ならびに経験を重ねていければと考えております。

(松村 紀明)